

第32回 平和体験学習 広島参加報告集



村は「平和の村宣言」の具現化の取り組みとして、広島市へ中学生を派遣する広島平和体験学習事業を支援しています。

8月4日から7日の日程で広島市平和体験学習に参加した中学生4名・引率者2名から報告をいただきました。

戦争によって訪れた現実

占冠中2年 杉岡春奈

今回、私は広島平和体験学習として広島に行かせていただきました。

8月6日の午前8時15分、広島の人々の生活が一瞬で変わり、美しい自然にあふれていた場所が上空500mの地点から原子爆弾が投下され、

焼け野原となりました。

そのため、放射線が放出され被爆してしまった人や命が奪われてしまった人、家や住む場所をなくしてしまった人などは、衝撃が強すぎて感情までも奪われ、涙が出ないことがあったそうです。

どれほど苦しくても、悲しくても感情のコントロールが出来なくなるということは、私たちが思っている以上に悲惨な思いをしているのだと強く思いました。

広島平和記念資料館では、広島被害範囲を表した写真は被害範囲がどれほど広いものかがとてもわかりました。また、倒壊した木造家屋や様々な写真を見て、当時のことを考えると、人々は生きることに一杯で脱出し、水を求め、家族を探し何十分も何時間も歩き続けました。どれほど大きなげがや火傷をしていても、「自分の身は自分で守る。そして、助け合う。」ということが大切だと思いました。

平和記念公園には、世界恒久平和実現への願いを込めて折られた鶴が、何千羽と飾られていました。私も、「もう二度と戦争を繰り返しませんように」「世界が平和でいられますように」という願いを込めて折りました。

これからも、72年前のように人々を苦しめることのないよう、核爆弾をなくし、戦争のない平和な世界を実現させていくことが大切だと思います。

切ない命

占冠中2年 杉岡若奈

私は、今回平和体験学習で広島に行かせていただきました。そこで私は特に人々の辛さや苦しさについて学んできました。

1945年8月6日午前8時15分、広島に落とされた原子爆弾は人々に大きな被害をもたらしました。

8月6日、私たちは証言の集いに参加しました。私は被爆者の川島ヒロエさんにお話しを聞かせていただきました。「戦争により親がいなくなった子どもはどのように生きたのか。」という質問に対し、「施設に入る子や入れない子、一人で死んでしまった子などがいた。」と答えてくれました。人々は原子爆弾が落とされてから4ヶ月以内にたくさんの症状が出ました。内臓のようなものはき出したり、脱毛、吐き気、高熱や口内炎、青色のものをはき出すなど人により様々ですが、たくさんの人を苦しめる症状が出ました。そのため戦後、生き残っても辛い思いをする人々がたくさんいて、中には50日間ずっと眠れない人がいたそうです。そのような辛い思いをする人はもう二度と出してはいけなないと心から思いました。

灯ろう流しでは、たくさんの人たちが灯ろうに願いを書き、川に流しました。私は「広島を世界に！」「平和な世界に！」と願いを書き流しました。

私はこれまで原爆が落とされ辛い

思いをした人々がいることは知っていましたが、詳しいことは全然知りませんでした。今回体験学習を通じて、人々の辛さや思い、症状、今の平和のすばらしさを理解できました。この学んだことをたくさんの人に伝えていきます。

核を保有している国は今もありません。私たちは核のない世界に向けて考えていきます。

協力し合う心

占冠中2年 山本 萌

私たちが広島を訪れたのは、『平和』について学ぶためで、私は『復興』について報告します。

まず、原爆の恐ろしさについて話します。広島は自然が豊かでとても美しい町でしたが、原爆一つで家が崩れ、怪我をして、家族や友人を失った人がたくさんいます。原爆に使われていたウランの量は、約50kgとされていますが、核分裂をして広島を地獄にしたのは1kgにも満たない量、だそうです。こんな狂気のなものにより、多くの命を失ってしまつた広島、そしてその広島の復興がどのようにして行われたのか、広島の回復に驚きました。

復興には、高度な技術、知恵などよりも、人々の強い意志、優しき、協力し合う心の方が強かったと思います。広島の人々はもちろん、日本中、そして世界の一部が「もうこのようなことを起こさせない。」と強く

誓い、広島を支援し核兵器をなくす活動をしています。美しく、たくましい未来のために人々はたたかっているのです。

被爆者の樽見亭二さんは、約13kmほど離れた所で爆発を体験されたと話してくださいました。樽見さんは軍の海上訓練だったので、熱いと感じ海に飛び込み顔を出しました。すると、キノコ雲があつて、少しきれいだったと語ります。現地の悲惨な様子を目撃し、命と家族の大切さを胸に刻んだそうです。

「笑、花の様に結び付き」と、私は灯ろうに書きました。私は今、何事もない日常を家族と友人と、命を使って生きています。しかし、当たり前はいつ崩れるかわかりません。誰かと毎日を過ごし、時にふざけあつて、学び合つて、ごく普通の日々を大切に、かみしめて生きたいと思ひました。

平和の大切さについて

占冠中2年 渡辺 翔輝

今回、僕は原爆が落とされた広島へ平和体験学習として行かせていただきました。そこで学んだことを報告します。

8月6日午前8時15分、自然があり、幸せでにぎやかに人々が暮らしている広島にアメリカ軍から実験として原爆が落とされました。建物もなくなくなり、人々の命も奪われました。原子爆弾がどのように開発されたの

かを説明します。アメリカは、1942年6月「マンハッタン計画」と呼ばれる極秘の原爆製造計画に着手しました。原爆開発が進むにつれ日本への使用が検討され、投下目標は都市の規模や爆風で効果的に損害を与えることができる地域などの基準から広島を選び、原爆を投下しました。そして3日後の8月9日午前11時2分長崎にも原爆を投下しました。その威力は爆心地から2km以内の建物を破壊し、放射線も放射し、強烈な熱線と爆風で約14万人もの命が失われました。

次に、直接被ばくにあつた樽見亭二さんにお話をお聞きしたことを報告します。樽見さんは約13km離れた所で軍隊の訓練をしていました。その時、急に熱いと感じ、海に飛び込み顔を上げると耳が痛くなるような爆音が聞こえたと言っていました。それが原爆が落ちたことを示していたのです。命と家族の大切さを昔も今も感じているそうです。

今回僕が平和体験を通して、平和記念資料館の写真などを見て、戦争はこんなに激しく、残こくだったことを知つてびっくりしました。戦争や核兵器で人々を苦しめるのはもうやめてほしいと思ひました。

広島平和体験学習で学んだこと

引率者 渡辺 幸恵
(中学生保護者)

はじめに、この度広島体験学習に

参加させていただきましたこと、この場をおかりし皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

広島への行くことは私にとつて初めての経験でした。日常では日々の生活に追われ深く「平和」を考えることもありませんでした。しかし、広島平和体験学習を通して現物の原爆ドームを目にした時、そして広島平和資料館にて原爆投下された広島を知つた時、幼いころからテレビでしか見たことのなかつた8月6日の平和式典に参列させていただいた時、被爆にあわれた方のお話を聞いた時、思いを記し灯籠流しをした時・・・私は、日々の生活に追われていることこそが平和であると実感いたしました。慌ただしくも幸せに生活できていることに感謝しなければならぬと思うことのできた体験でした。

広島へ向かう前、「広島は暑いよ」と教えていただきましたが、本当にとても暑い広島でした。じつとしていても汗がポタポタと落ちてくる・・・。広島に原子爆弾が投下された1945年(昭和20年)8月6日、午前8時15分も同じように暑い日でした。

アメリカが戦争を終結させる手段は原爆投下。原爆投下で戦争が終わればソ連より優位にたつことができることでした。投下目標地の条件として、①アメリカが原爆効果を正確に測定できる4.8km以上の都市、②連